

## 関西民放クラブだより

### 東京オリンピック聖火リレー

竹村章治(KTV)

1964年9月28日、東京五輪の聖火が奈良県から京都府にリレーされ、私が住む宇治市には正午過ぎに着するという。今から55年前のことだが、その当時の感動が瞬時に蘇り、この日は私にとって生涯特別の日にもなっている。



【オリンピック聖火リレー】

64年8月初旬、我が陸上競技部の夏季合宿は信州松本陸上競技場で行われていた。大学1回生の短距離バートの練習は走り込み中心のメニューで只々『忍』の一字。耐え、厳しく、激しかったが、東京五輪に出場する短距離陣やリレーメンバーが我々と同じ場所での最後の調整を行っており、昼休みや練習後は当時のスター選手と話をしたり、指導を仰ぐこともあった。和やかな雰囲気の中、合宿所に教育

委員会から電話が入り、聖火リレーの正走者に選ばれたことを告げられた。晴天の霹靂とはこういうことか。

一瞬の驚きと喜び、高揚した気持ちは抑えきれず、なかなか冷静さを取り戻すことが出来なかったことを覚えている。

宇治市からは6区間、6人の正走者が選ばれ、市役所の近くで何度か聖火リレーのリハーサルが行われた。トーチの長さは65センチ、重さ1・15キログラム。これだと女性にも優しい。当日のレクチュアはトーチを持つ位置、角度、点火方法、走るスピード、などなどであった。

待ちに待った9月28日、朝からの雨も正午前にはすっかり上がり、中継所には大勢の人達が詰めかけ、身動きがとれない状況。押すな圧すなで大混乱の中、予定の通過時刻よりも少し遅れて聖火が近づいてきた。沿道の拍手声援は段々と大きくなり、やっこのことで中継ゾーンに全員が到着。後輩から聖火を点火すると、真っ赤な炎と真っ白な煙が立ち込め、勢い良くトーチは燃え始めた。観衆から大きな拍手が鳴り止まず号令とともに先導の白バイが走り出した。沿道には人が途切れず並び、胸が更に高鳴った。各区間の

編成は正走者1名、副走者2名、随走者20名、計23名が力強く次の中継所を目指した。

いよいよ2020年東京五輪は7月24日に新国立競技場の聖火台に点火される。復興五輪を全面に打ち出すとも、どんな大会になるか楽しみにしている。

### 関西が元気です

上村十三子(MBS)

「落語(上方芸能)を楽しむ会」では、今年も初春文楽公演を楽しみました。新年に文楽を楽しむようになって、はや6回目です。今年の演目は、昼の部の「二人禿」「伽羅先代萩」「壺坂観音霊験記」。いずれも文楽では名作中の名作とあって、我々26人の会員は見ごたえのある熱演を堪能しました。

いつも文楽劇場の計らいで、前方のいい席を確保していただいているのですが、今回は右手の太夫、三味線の演台の間近かで、演者の迫力ある熱演ぶりが迫ってきて、より迫力を感じ取りました。

鑑賞後は、人形遣い吉田勘市さんの説明を受けました。今、舞台上で見たばかりの茶屋の嬢の人形を手に、遣い方のあれこれや苦労話などを説明し

ていただき、興味深いひとときでした。

最近関西が元気です。まず文化の面では、昨年7月に神戸の新開地に落語の寄席小屋「喜楽館」がオープン、大阪の天満天神繁昌亭と並んで、賑わいを見せています。また今年1月には日本では初めての講談専門劇場「此花千鳥亭」が開館しました。旭堂小南陵さん、南陵さんらの尽力によるものです。講談は、最近東京の神田松之丞さんが、大ブームを起こしていますが、関西でも専用劇場は70年ぶりの復活とあって、関西民放クラブでも応援していきたいと思っています。また2021年の完成を目指して「大阪中之島美術館」の建設が進められています。ユニバーサルスタジオもインバウンドのお蔭もあり、連日超満員の盛況です。

2025年には、大阪関西万博の開催が決定しましたし、統合型IRの誘致も検討されています。今年6月には、G20大阪サミットが開催され、世界の要人が大挙大阪にやってきます。

東京一極集中のなか、ようやく関西にも活気が満ちてきました。因みに3月22日開催予定の次回「落語を楽しむ会」は、笑福亭鶴瓶さんと桂文珍さんの競演を、天満天神繁昌亭で鑑賞します。難波の伝統ある芸能を今後も応援して参ります